

## 本に親しみだした頃

国際コミュニケーション学部教授 樋野 芳雄



「そのお話を読んでもらうとふたりともいつもしんみりしちゃうのね」。父親の布団の両側に2歳下の弟と潜り込んで読んでもらう、『坪田穰治童話集』の「お猿の風船」

である。ほかの「善太と三平」シリーズは笑いながら楽しく聞けるのに、この話だけは母親の言うとおりのものだ。それでも何度もせがんで読んでもらった。本とのつきあいをさかのぼっていくと、そんな記憶がよみがえってくる。『ロビンソン・クルーソー』や『グリム童話』も、そうして読んでもらったものだった。

小学校の中学年には漫画に浸った。『少年』『少年画報』『冒険王』などの少年漫画雑誌があることを知ったし、創刊された『少年マガジン』をおぼが買ってくれもした。ちょうど、手塚治虫、この4月に亡くなった横山光輝、桑田次郎、武内つなよし、堀江卓、山根赤鬼・青鬼、寺田ヒロオ、ムロ谷ツネ像といった描き手が活躍していた頃である。『月光仮面』や『赤胴鈴之助』『まぼろし探偵』『少年ジェット』『矢車剣之介』のように、テレビ番組やラジオドラマになるものもあった。プロレス漫画もあった。杉浦茂の『猿飛佐助』は飛び切り気に入っていた。

中学校時代には、小学生のときに読んだ『トムソーヤの冒険』の続編のつもりで『ハックルベリー・フィンの冒険』を読んだりした。「ハックルベリー・フィン」という名前の不思議な響きは、小学校低学年の頃、ラジオで朗読を聞いて心に残っていたような気がする。中学校の卒業も近づく時期、ヘッセ

の『デミアン』などを読み始めて、読書生活も違った段階に入ることになったろうか。

高校の同級生には読書力のある友人がいた。筑摩書房版の『太宰治全集』を3日で読んでしまう。授業中も机の下で広げるのである。しょっちゅうそういう読み方をしていたから、当然教師たちも気づいていたろうが、やめさせるようなことはなかった。ときどき、わざと当てたりはする。それでも周りの友だちに質問を聞き直して、ちゃんと答えてしまうので、そこでおしまい。当時ノーベル文学賞を受けたショーロホフの『静かなドン』を文庫本で読み出して、そのスピードに小遣いの方が追い付かなくなったと言っていた。わたしが読んだ長いものは『ジャン・クリストフ』だった。

その頃、岩波書店が『100冊の本』という小冊子を出していた。文庫本から選定し、解説を加えた読書案内である。級友たちも持っていて、競争で読んでいる連中もいた。高校生がどれもこれも買うというわけにはいかない。図書館に行けば、岩波文庫が並んでいる。『赤と黒』なども借りてすませた。

高校2年生の春、清水幾太郎『現代思想』が出版され、関連する文章を清水氏が新聞の文化欄に寄せた。これをめぐって坂本義和、林健太郎、加藤周一といった人々の論評が次々に載り、論争状況になった。その年の秋には、サルトルがボーヴォワールとともに来日し、知識人を擁護するという連続講演を行った。新聞が特集面を組んでその内容を報じた。清水幾太郎がその講演内容に批判を加えた。それを市井三郎がさらに批判する。秋も深まってから、『現代思想』を読んでみることにした。岩波全書が辛子色の堅

い表紙に覆われ、箱に取められていた頃の、上下2巻本だった。こうした書物や文章に触れるうちに、時代論と知識人論がない交ぜになって、わたしの中に残った。

やがて、『100冊の本』の延長か、テーマごとに文庫本を組み合わせた『考える人／5つの箱』というのが売り出された。学校の帰りに、都電に乗って岩波に買いに行った。今の信山社ビルが建つ前で、黒いどっしりとした作りの書棚に本が収まっている。奥の会計台後ろの壁には、漱石の筆になるという「岩波書店」の額が掛かっている。わたしの購入した「国家とは何か」という箱には、『三酔人経綸問答』『文明論之概略』『蹇蹇録』『君主論』『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』など15点がセットになっていた。もちろんすぐに読みこなせたわけではなく、のちの折に触れて読んでいくことになる。選者は丸山眞男・日高六郎・福田歓一、福田氏が解説を書いていた。

世間という書物、世界という書物を読むというデカルトの言葉と出会ったのも、10代半ばだった。蠅螂の斧であろうとも、自ら斧を振り上げて対象に立ち向かい、世界を読みこなそうとする。そういう姿勢へのあこがれが、どこかに点った。

自分というものを自覚するようになって、無意識のうちにも生きる道を手探りするようになると、読書も生き方の模索の一環になる。何のために本を読むのか。実際に読むときにはいちいち意識してなどいないが、結局は自分をつくるため、自分が自分になっていくためだろう。楽しみとしての読書、調べものための読書、疑問を解くための読書、業務としての読書。それらが混じり合い、溶け合って、自分にとってなにかの糧になる。

研究のためには、あちらからやってくる書物とのふとした出会いを待っているわけにはいかない。必要文献、関連文献は、芋蔓式にでもなんでも、ともかくたぐり寄せ、探し

出して読んでいく。

しかし、読書がよるこびでなくなるのは寂しい。自分の内面の声に注意深く耳を傾ける。その渴望に伝えてくれそうな本との出会いに向けて自分を開いておく。ものを読むことは習慣化し、仕事ともなっているだけに、かえって心していたいと思う。

大きく言えば、どのようなやり方をするにしろ、個人が持つ知の水平線は時代によって制約される。時代が抱える問題と時代が与える書籍群に囲まれて、関心が生まれる。精神が動き始める。動き続けていく中で、好きなもの、気に入ったもの、何か自分に合うもの、それを段々と自覚していく。余分なものは気がつけば削ぎ落としもするし、自ずと剥げ落ちてもいく。制約の中でもとにかく動きを止めないことで、次第に自分になっていく。人とのつながりも、そういう中でしか生まれえないのだろう。

愛大のいろいろな場所の中でも、図書館で過ごした時間の累計は、かなりのものになるはずだ。何か特定の調べものをするときや禁帯出図書を利用するとき以外は、図書館の中で図書資料自体を読むことはまずない。ほとんどは図書を探し回ったり、コピーをとったりする時間だった。豊橋図書館所蔵のある本は、昭和13年12月10日発行という奥付を持っている。表紙見返しに墨書がある。「謹呈 著者 近衛公爵閣下」。日付の時点では、贈られた側の近衛文麿は現職の内閣総理大臣である（年が明けて1月4日に総辞職した）。近衛家寄贈本の1冊だった。こういうささやかな「発見」も、図書館を利用し、本に親しむ楽しみのうちである。

